

記
録

青木晴夫氏（広島大学一期生、カリフォルニア大学名誉教授）インタビュー

青
木
晴
夫

年月日 第一回目 平成二八年七月七日

第二回目 平成二八年七月二〇日

場所 電話インタビュー

語り手 青木 晴夫

聞き手 石田 雅春

趣旨 広島大学一期生の青木晴夫氏に学生時代の思い出を中心にご証言をいただいた。本学は前身校時代から数多くの研究者を輩出してきたが、海外の大学で活躍された方は少数である。国際化が大学の重要課題とされるなか青木氏の体験は貴重な事例と言えよう。なお、本稿は紙幅の関係でインタビューの主要部分を抜粋・編集したものである。（石田記）

生い立ちについて

○石田 生い立ちについてお教え下さい。



写真1 両親と1歳の妹ともに（昭和8年頃）

○青木 私は母方の祖父の家に生まれて、大人は四人、祖父・祖母・父・母で、私は長男です。生まれたのは昭和五年四月一日です。ということは、早生まれの最後なので、いつでも一番発育が遅れておりました。ですから、体育の点数がいつも悪い。走ったり、物を投げたり、鉄棒とか、そういうことに誠に都合が悪い。かなり早い時期に、これ

は体育の関係で飯が食えないということは分かっていました。しようがないから学者になろうとは別に思っておりませんが。

そして、祖父の職業は車大工でした。そのころはまだ木造の、牛が引つ張る荷車、牛車でした。

○石田 お父さまのお仕事は何をされていたのですか。

○青木 群山(クンサン)という町は米の輸出港のようなところです。

あとに控えていた湖南平野は錦江(キンコウ)の川にできた非常に土地の肥えた平野で、そのためにお米がたくさん出る所です。

父は朝鮮総督府の穀物検査所(略称・米検)という、お米の検査をする所にいました。長崎から初めて朝鮮にやってきた時は、水原(スーオン)の農事試験場に勤めていました。だいたい米というのは南方のものでしょう。ですから朝鮮は寒い気候に耐えるような品種を改良していったかったわけで、そういう仕事をやっていました。

そしてその結果、職業としてはお米の検査官みたいなことで群山に配属された。だから初めはお役所ですね。そして後になって、米穀倉庫株式会社という倉庫の管理をする会社に引き抜かれて、お米関係の仕事をしていました。

○石田 お母様はどういう方だったのですか。

○青木 当時、釜山とソウルに日本人のための高等女学校があったのですが、寮があるのは釜山だったので、おふくろは釜山の高等女学校を出ていて、その間に好きなことばかりやったそうです。

あるとき戸棚みたいな所からどんどんいろいろな物が出てくるので、「これはいったい誰のもの？」と私が聞いたら、母は「それは私

が高等女学校の時にやったのよ」とか言って。お茶の道具からカメラから。そのころ、蛇腹の付いたカメラを女の子が持つて歩くのはおかしいと思うのですが。それからバイオリン、三味線。そのような関係で、母親は非常にいろんなことをする人間でした。

○石田 おじいさまがお住まいなのは山口県のほうですか。それとも朝鮮になるのですか。

○青木 祖父は生まれが山口で、大工の修行をしたのが大阪です。大阪で身につけた大工の仕事で朝鮮で開業しようと。その開業した先で僕が生まれたというわけです。

だから生まれた時は、祖父が建てた住居兼工場みたいな所。工場の半分は木工所と言いますか、牛車の台と車の心棒とかを作る所で、もう半分は大きな車にはめる鉄のタイヤいろいろなものを結わい付ける鉄の鉤を作ったりする鍛冶場に分かれておりました。そして手伝う方が一人いらっちゃって、二人でやっていました。

それが仕事関係の建物。それに直結した老夫婦のいる所、それから新夫婦のほうは後ろで、私が生まれた所は後ろ側というわけです。

○石田 当時の朝鮮では日本人は特別な扱いだったのでしょうか。

○青木 群山の町は、私が生まれたころ、総人口が五万人ぐらいだったと思います。そのうち三万人が朝鮮人、二万人が日本人。私の生まれた家などは角の家だったので、隣が朝鮮人、お向かいさんも朝鮮人、もう一つのお向かいさんは中国人、それから日本の人もいるというふうに混じっている。別にすみ分けるとか、日本人の住宅が決まっているとか、そういうことではなくて、いろいろなものが混じって

ました。私の遊び友達もいろいろな人がいて、中にはお父さんが洋服屋をしている白系ロシアの人がいました。

そして、家の中でも、祖父は大阪弁、祖母は四国の生まれなので伊予弁、母は小さい時からあまり出ていないので山口弁、父は純粹な長崎弁ですから、食卓で食事をするようになってからは、その四つの方言を毎食聞かされていました（笑）。それで、表に出ると朝鮮語で話したり、日本語で話したり。

そして、みんな勝手なことをやるもので、例えば、中国の人は中国の祭日に青天白日の国旗を出している。日本人は日本の祭日に日本の国旗を出している。そうすると、その旗が出ている所に行くと、お餅がもらえたり、まんじゅうがもらえたりするものですから、子どもの時は勝手なことをしたものです。そういう所に育っておりました。

○石田 小学校は、日本人だけのクラスとか朝鮮人だけのクラスとかいうのはなくて、一緒だったのですか。

○青木 いえ、日本人だけの学校と、朝鮮人だけの学校と分かれていました。ところが、日本人の学校には朝鮮人も行けるので、朝鮮人の学校に日本人が行った記憶はないのですが、私どもの同級生には朝鮮人が何人もいました。しかも、そういう人たちは非常にお金持ちで、私のすぐ近くにいた同級生などは、「君のお母さんがあそこにいるよ」と言うと、「いや、彼女は私の父親の妻であるけれども、私の母親ではない」ということで、それで初めて朝鮮の社会では一夫多妻制が生きているということが分かったと。

ですから、言葉もごちゃ混ぜになっっているし、文化もごちゃ混ぜに

なっているという関係でした。

○石田 当時は、まだ皆さん日常的に朝鮮語を使っておられたのですね。

○青木 道ではめちゃくちゃです。そのころは冷蔵庫がありませんので、母と祖母は毎日のように市場に買い物に行くわけです。ちょうどあそこは海のものもあるし、いろいろな山のものもあって、売っているのは朝鮮の人がかなり多かったので、日朝混ざった取引をやっている。私も、あんなでたらめを言って、よく通じるなと思っていました（笑）。

○石田 先ほど体育が苦手とおっしゃっていましたが、ほかの教科の成績はどうだったのですか。

○青木 一番になったことはありません。というのは、体育も入れて平均を出すと必ず落ちる。たいてい一番目から五番目ぐらいに入っていました。すると学校の規則で、五番目ぐらいまでは、次の学年の国語の教科書とか数学の本とかを無料でくれることになっていたのです。おかげさまで、あまり教科書を買ったことはない。ですからトップでもないがおしまいでない、優等生の最下級といったところでした。

中学校への進学、予科練への入隊

○石田 その後、群山の公立中学校に進学されますよね。当時の中学校の受験は大変だったのではないですか。

○青木 そんなのもあったのでしょうかけれども、あまり勉強もしないで、ふわふわと入ったような気がします。

○石田 内地の小学校だと、学校が終わった後に、先生が進学する生徒を残して補習授業をして、とにかく一人でも多く進学させようとしていたと聞きますが、そういう補習などを受けたご記憶はありますか。

○青木 それはあまりなかったと思います。みんな、のんきな人間ばかりで。

ただ、私たちが中学の一年ぐらいのころから、だんだん戦争が厳しくなってきた学校へ行く日数が少なくなり、若い働き手が戦争に取られている農家の手伝いをしたり。それも初めは田植えとか、かなり簡単なことをやっていたのですが、三年生の時でしたか、おやじが北朝鮮へ転勤になったものですから、一緒に行って、その時は、その近所にあった戦闘機の飛行場の地ならしみたいなことをさせられたことがあります。

それから、私たちが行くのは咸興（ハムング）公立中学校だったのですが、すぐ南に興南（フングナム）という、日本式に言えば窒素肥料の大きな工場があり、そこで普通のガソリンに混ぜるとオクタン価が上がる液体、化学燃料みたいなものを作っているのです、その工場に動員に行ったことがあります。ですから、咸興の時などは、学校へ行く日数より工場とか飛行場に行く日数のほうが多かったですね。

○石田 では、中学校に入ったら勉強ではなくて動員ばかりだったのですね。

○青木 はい。そして、その学校へ行くのも、数学とか物理とか化学とかはきちんとやっただけですが、英語みたいなものは教員のその日の都合で往々にして切り替えられまして、お粗末極まるものです。敵性

語というわけですね。そのころは、もうあまり勉強していませんね。戦争色が強くなるにつけて、だんだん勉強しなくなる。学校へ行くというよりは、予備労働力みたいなことで使われたという感じですよ。

○石田 略歴によると中学校は四回替わられていますね。

○青木 ええ、最初は群山中学校。そして、おやじが転勤になって北朝鮮の咸興へ。その次に全州の、北中学というのは朝鮮人の中学校で、南中学というのが日本人の中学校だったのですが、そこでは本当に学校に行かなくて、松根掘りというのですか。松の木の根から油が取れるというので、そういうところから燃料を探す。それは、戦争もぎりぎりだということが分かるはずですが、何しろ完全な情報統制でしたから、負けていることは分かっていたいなくて、終戦の年の一月に転入学、五月の終わりに予科練に入隊しました。

○石田 予科練に志願されたのは、何かご事情があったのですか。

○青木 それは北朝鮮の時に志願したのですが、何しろ日本人は、朝鮮の人の模範として愛国心があるということを示さなければいけないということで、中学の先生たちからも随分たきつけられた。私などは体が小さいだけで故障はなかったし、近眼でもなかったの、「青木、おまえ、なぜ志願しないんだ」と。それで調子が悪いので、しかたなく、たぶん身体検査で落ちるだろうと自信を持って受けたのですが、もう最後の最後でゼいたくは言っていられないので、僕などでも通ってしまった。

それで、その合格通知が結局付いて回り、全州に転校した後、入隊の許可が出たわけです。その時は釜山まで行ったところが、前のフェ

リーがアメリカの潜水艦に攻撃されて沈没した関係があって、次の船が出るまで、だいぶ船待ちをしなければいけなかった。

午前四時、暗いときに波止場へ行き、両方に駆逐艦の護衛が付いて、その間に二隻の連絡船が走っている。下関は港の中に機雷がたくさん仕掛けてあって入れませんので、山口県の仙崎の東まで行くと須佐という所があった。須佐には大きな船を泊める所がないので、沖に泊めて小さな船で何回も陸に上がり、それから山口県の防府にあった海軍通信学校に入隊したわけです。

その時、下関の町を通る際には「みんな、よろい戸を下ろしてください」と車掌がやってきた。下関は爆撃で町中燃えているわけです。列車があそこを通過したのは夜だったのですが、本当に右も左も火が燃えていて、これは母国日本とかいうけど危ないなと思って行ったものです。

○石田 防府の通信学校に入隊されたということですが、予科練の訓練というのは実質二カ月間だけだったのですか。

○青木 はい。初めは海軍飛行予科練習生ですか。「飛行」がついているから飛行兵ですよ。ところが、そのころ、新米のわれわれが飛ばせるような飛行機はないわけです。ペテランしか残っていない。それで今度は一つずれて人間魚雷になるほうに回されることになったのですが、こちらのほうも先任の人がやる。

昨日、今日入ったような新米がやることではないので、結局、特攻隊は確かに特攻隊ですが、陸上特攻隊。敵が敵前上陸するとタンク（戦車）などで上がってくるわけですが、その無限軌道（キャタピラー）

をたたき切るために、竹の棒の先に爆弾を付けて、たこつぽから飛び出し、敵の戦車が動けないように無限軌道を切り、それから今度はたこつぽに逃げ戻り、あとは楽しく人生を送るといふ筋書き。

ところが、その前に火炎放射機がありますから、それに焼き殺されるのが最初だと思うのですが、竹やりでおばさん連中まで駆り出した時ですから、われわれは陸上特攻隊の仕事を目標にして、いろいろ訓練をさせられました。

○石田 カッター（短艇漕ぎ）のような基本的な訓練はなしで、いきなり実践的な訓練から入っていったのですか。

○青木 ええ、初めは確かにカッターなどもこぎましたが、私のような小さい人間には、櫓（ろ）というのか、櫂（かい）というのか、あれがすごく重いんですね。下士官などは簡単に「櫂立て」なんて言いますが大変です。

○石田 分かります。中学校三年生ですから体も小さいし。

○青木 ですから、あまりきちんとしたことはやらなかったですね。でも、食事はきちんとしていたというか、むしろ民間の食事が悪かったので、まともな食事がごちそうに見えてきたという時代です。

終戦・復員

○石田 終戦の時、八月一五日はどうだったのですか。

○青木 八月一五日は、基地の司令官、海軍少将だったと思いますが、その人から「第一種軍装で整列せよ」という命令がありました。玉音放送があるというので、われわれは気をつけをして聞いていたわけ

す。ところが、それは雑音が入りまして全然聞こえない。

今も、その時の基地の司令官のあいさつを覚えていますが、「玉音朗々していたけれども内容はちっとも分からなかった」と(笑)。ところが、「広島や長崎では新型の爆弾が投下されたということを知っている。ソビエトは、われわれの不可侵条約を破り、ついに満州へ突入したという情報もある。だから、大元帥陛下のお話はよく聞き取れなかったけれども、小官が拝察し奉るには、各員一層奮励努力せよということであろうと思う。陛下のお言葉は、原文が回ってき次第、諸君に伝えるけれども、今のところ頑張り」ということで、それで終わりになったのです。

そうしたら、翌日にまた「第一種軍装で整列せよ」という命令がありまして、それで並んでいたところ、今度は紙に書いた、いわゆる終戦の詔書が届いておりまして、海軍少将が白い手袋でそれを読み上げて、最後に随分涙をこぼし、戦争が終わってしまったと。

ですから、八月一六日になるまで私たちは盛んに戦争をしていたわけです。司令官が分からないというわけですからね。最後の一兵まで死んでしまうつもりという勢いで進んでいるわけですから、八月一日に戦争が終わったなんて雑音ぐらいでは全然分からないわけです。

○石田 戦争が終わってから八月末まで、ずっと基地のほうにおられたのですか。

○青木 結局、終戦処理というのでしうか、いろいろなことを片付けないといけないかったです。それで、みんな、うちへ帰れと言うと交通機関は大変なことになるので、私どもが海軍から除隊に

なったのは八月の末だったと思います。

ちょうど台風の時期にかかっていたと思います。大雨で、夜、防府通信学校を出ていけと言われて、三田尻の駅へ行きました。その時は、まだ灯火管制されているので、蒸気機関車などもヘッドライトに覆いがかかっている、細い線しか前が光って見えない。そういうところで土砂降り、乗せられたのが無蓋貨車です。ですから、七つボタン(予科練の制服のこと)でびしょぬれで九州に行きました。

○石田 最初から長崎のお父さまのご実家を目指して出発されたのですか。

○青木 最初は、うちの両親が朝鮮にいるから「朝鮮に帰る」と言ったのですが、「朝鮮はもう日本ではない。だから、おまえはあそこにはいけない。どこか日本国内で探せ」とか言われて。

ところが(長崎の実家は)小学校の六年生の時に母親に付いて行っただけですから、全然記憶がない。だいたいあの近所にあるぐらいのことしか分かっていない。そこで諫早という駅まで行って降りて、それから一週間ぐらい毎日(実家のある早見は)どこかを探しました。

小学校六年生の時はバスで行けたのですが、その時はバス線がなく、おまけに諫早の駅の近くにいる人が、徴用でよそからやってきた人が多くて、あっちへ行き、こっちへ行きして、しばらくいました。そのころは駅で寝ている人がたくさんいましたから、べつにホームレスのような感じはしないわけです。

○石田 地元の人がいないから、最初は聞いても分からなかったのですね。本当にご実家が見つかって良かったですね。

○青木 その時は運が良かったというか、毎日、夕方になると駅に戻って寝るわけです。列車が着くたびに、いろいろな人が乗り込んだり、降りてきたりするのですが、その中に予科練の軍服を着ているのが二人いまして、こちらまでいぶ汚れた予科練の服を着ているので、お互いに「おまえ、どこの部隊か」なんて言っているうちに、「どこへ行くんだ」と言うと、その一人が「俺、早見という所へ行くんだ」と言う。

三人いたのですが、もう一人は満州に家があるので満州に帰れなくて行く所がないから連れてきたと。ですから、三人で早見を探して回っているうちに、島原鉄道の踏切を渡ってもう少し行った所で、駅からかなり離れた所で聞いたところ、「この先、二里ぐらい行った所に早見というところがあつたような気がしますよ」と言われて、それで行きました。

私どもは衣囊（いのう）に着替えとかを入れていたのですが、その衣囊が重そうだから、うちの車を貸してあげると。用が済んだら返してくださいと言われて猫車という木製の車に衣囊を三つ積んで、それを引っ張って二里の道を歩いていったわけです。

そして、最後の山を越すと、海が見えて、天草の島が下に見える。その所で小さな貯水池があるのですが、それを小学校六年生の時に見たのを覚えていて、「この池の先に祖母と祖父の家があるから、おまえ達も早いこと親類の家を見つけることができるように」と言っただけです。

○石田 家が見つかった時には、ほっとされたでしょう。

○青木 もう、それは。そこで祖母が最初に言った言葉を覚えています。「晴夫です」と言ったところが、長崎弁で「母ちゃんな、ゆうやいてて」（お母さんは、よくもまあ（長男を）手放すことができてるの意）と言われた。その時に僕は、自分のおばあさんはやっぱり偉いのだなと。あなたの父親は元氣かというようなことは全然聞かないですね。「あなたの母親は、あなたと別れるのがいくらつらかったらうか」と言う。

もう一人の母親の心情を最初に察するというのは、大したものだなと思って。自分のおばあさんに感心するのも変ですが、急にほっとした感じがするのは、そういうふうな非常に人間的な同情が感じられて、一息ついた感じですよ。

○石田 ご両親が引き揚げてこられたのは、いつごろになったのですか。

○青木 終戦の年の一月だったと思います。

○石田 当時の状況から言うと、ほとんど何も持たずに引き揚げてこられたのですよね。

○青木 はい。財産が不動産で、家は軒か持っていたのですが、そういうものを担いで持って帰るわけにいかないので。結局、動かない所に財産を動かさないかたちで持っていたというのが一番ひどかったと思います。

広島高等師範学校への入学

○石田 そういう中で広島高等師範学校の試験を受けて入学されるの

ですよね。そのいきさつを教えてください。

○青木 母校について、あまりこういうことを言っただけはいけないけれど、皆さん非常に同情があつて、入学レベルを下げてくださったのではないかと思います。諫早の中学校と祖父母の家は二里ぐらい離れておりまして、先ほど申し上げたようにバスがなかったので歩いて行く。だいたい二時間かかったので、八時に学校という家を出るのが六時。だから、冬場になりますと、本当に星をいただいで出て、月を踏んで帰るといふ毎日だったわけです。

しかし、その時の英語の先生がとてもいい方で、おまけに私は中学校を四つ替わっていますから四種類の教科書を使ったわけです。しかも、英語のクラスは終わりになるとほとんど教練が変わってしまったので、英語はゼロに近い。おそらくジョンとかメリーとかいふ名前も入れて、(単語を) 百知っていたか知らないかぐらいだと思います。

それで、その時に生意気なことに、大学の教科書にワシントン・アーヴィング (Washington Irving) が書いた『スケッチ・ブック (The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.)』というのがありまして、それを諫早の町で買ったものですから、「先生、これ、少しずつ読んでいくのですが、分からないことがあつたら教えてくださいませんか」と言う、「構わないよ」ということで、放課後、調べた結果をいちいち聞きに行つたわけです。

その時は「The」と「E」以外は全部字引を引いたような(笑)。もう鉛筆で真っ黒になるような勉強をしまして、分からないことも本當にくだらないことだつたと思います。それを根気よく教えてください

て。

おまけに通学は行きが二時間、帰りが二時間、合計毎日四時間歩いているので、二宮尊徳ではないけれど、その間に机に向かわないで勉強する癖ができました。机できちんと勉強する癖がつかなくなつたみたいなことで、立つて歩いている間にいろいろなことをやると。

○石田 かなり特殊な能力ですね(笑)。

○青木 それで、どこへ行きましようといったところが、おやじに「九州だつたら第五高等学校ぐらいどうだ」と言われて、「じゃあ、やってみよう」と言つたのですが、それは落ちました。それはそうですよね、何も勉強していないのですから。



写真2 新入生歓迎のストーム
(文理大正門前、昭和23年4月24日)

そして、一年間浪人をして、その間に（新円切り換えで）朝鮮から持ってきたお金が百分の何かかに減ってしまったわけです。それで、おやじが「俺、おまえにやる金はないけど、その代わり好きなことをやれ」ということで、師範学校に行くのと給費制があるので、一番近い広島島の試験を受けました。それで何かの間違いで通ってしまったわけです。

○石田 受験者はかなり多かったですか。

○青木 その時の感じでは、五〇人ぐらい入る教室で試験を受けて、倍率を考えると、一列に並んでいたのが七名なので、各列で一番よくできれば通ると考えたことがあります。そうすると倍率が七倍ぐらいだったわけですかね。なぜ通ったのか、よく分からないです。何かの間違いか（笑）。何か不思議なご縁で、結局すれすれのお情けか何かで入れていただいたのではないかと思います。

高等師範学校での学校生活

○石田 お送り頂いた写真をもとに学生生活についてお伺いしたいのですが、「新入生歓迎のストーム」という写真は淳風寮に入ったその日の出来事だったのですか。

○青木 その日かどうか分かりませんが、その月では間違いなくありました。その時は、まだ寒かったように思います。ですから、水を掛けられるとかいうのは、びくびくしていたのですが（笑）。

結局、真ん中でたき火をして、その周りをぐるぐる回るだけです。ただ、上級生は寮歌とか校歌とか応援歌とかを知っていますから、そ

ういう歌を歌う。私たちは、分かっているものはそれについて歌う。入学した喜びみたいなもので歓迎会。ただ、そのころは食べものが少ない時ですから、どこかへ乗り込んで飲んだり食べたりするというようなことよりも、むしろ、ああいうかたちでやるという。あれはおそらく旧制の高等学校の蛮カラ伝統の広がりなのではないかと思いません。

○石田 青木先生が二年生、三年生になった時に、新入生をこういっ

たかたちで歓迎されたのですか。

○青木 いえ、あれは結局、高等師範の伝統みたいなもので、大学になると、みんなやたらに紳士的になるのですね（笑）。旧制の高等学校というと蛮カラで、もう朴菌の下駄を鳴らすのですが、大学に入ると急にみんな頭をくして整えて、下駄を履かないで靴を履いたりという、そんな感じが広島でもあったのだと思います。



写真3 淳風寮四号室室員集合写真（昭和23年4月24日）
写真中央が森滝市郎氏。

それともう一つは、高等師範というのは男性だけです。ところが新制になると男女共学で、女性が入ってくると男性がやたらに紳士的になるといふ違いも多少はあるような気がします。

○石田 淳風寮の写真を幾つか送っていただいたのですが、淳風寮での生活はどのようなものでしたか。

○青木 最初は寮で、確か四号室。あの写真に出てくる人間が全部一部屋に入っていたわけですから。

○石田 森滝（市郎）先生が真ん中に写っている写真ですね。

○青木 はい。森滝先生以外は、みんな同じ部屋に住んでいたわけですから。

○石田 すし詰めに近い状態ですね。寮に入られたら、部屋ごとに歓迎行事とかはあったのですか。

○青木 結局、ストーム踊りみたいなものが全寮のまとめた馬鹿騒ぎで、一つ一つの部屋では何もなかったように思います。ただ、部屋ごとで少し。例えば私どもは生物の部屋に入ることになりました。入る前に決まりが変わったため、一年生はいろいろな専門が違うわけですが、二年以上は一つの専門でした。そうすると、私どもの上級生はみんな生物で、その連中は植物採取によく出ていっていましたが、帰ってくる時、図鑑で、これは何の花、これは何の草というような分類をして、最後に食べられるものと食べられないものを分ける。ですから、食べられるもののごちそうには私たちもあずかりました（笑）。

○石田 この写真では、なぜ森滝先生が真ん中におられるのですか。

○青木 森滝先生は一人だけではなくて、子どもさん二人、坊ちゃん

と嬢ちゃんと。奥さんは確か亡くなったのではないかと。それで子どもさんとも二人は一部屋借りて寮にいらっしゃったわけですね。

それと同時に、寮監の仕事もなさっていた。ですから、森滝先生がいろいろ主になって、詩吟だとか音楽鑑賞だとか、田舎からいろいろ集まった高等師範の新入生に文化的教養を教えてくださったわけですね。おまけに、森滝先生はご専門が京都大学の倫理です。倫理はよく分かりませんが、とにかくお行儀よくしていなければいけないと。

それで、森滝先生は原爆のために片目がよく見えにならない。そういうことで、いつも和服でいらっしゃったわけですね。そして、やはり専門の関係なのでしょう。人格者ですから、みんな尊敬しておりました。何か問題があると先生にご相談にあがるというようなことで。

結果的にいうと、オックスフォードとかケンブリッジで、いわゆる各カレッジの中に先生が、チューターが住んでいるので、そういうのと非常に似たことになって、とても良かったと思います。

広島大学への入学

○石田 昭和二四年に新制の広島大学ができると、高等師範学校の学生は広島大学の入学試験を受けたのですか。

○青木 はい。私どもは、試験を受けて新制で出てもいいし、試験を受けないで旧制で出てもいいと。旧制で出ると一年早く出るわけですね。それで、私どもは非常にのんきに考えておりました。落ちれば旧制で出るし、通れば新制で出るという気楽なつもりで受けました。それで偶然、私は通ってしまったので、新制の大学を出ました。

○石田 高等師範学校は給費制だから授業料免除でお金がもらえますが、広島大学に行ってしまうと、授業料も払って生活費も稼がないといけなくなっただのではないですか。

○青木 はい。ですから、そういう面も考えて、そういう可能性がない場合は旧制で出るという。私は一年間の間にいろいろなアルバイトの口などを探したものですから、何とかやれそうだというところで試験を受けました。

○石田 アルバイトというのは、どういったことをされていたのですか。

○青木 広島文化評論社で夏休みの英語の宿題集みたいなものを出していて、それをあちこちの中学校へ持って行って売るというセールスとか、私が文理大の先輩からもらったのは、家庭教師の仕事。それから、五日市の造幣局で英語の会話を教える仕事とか、そういうのをいろいろもらっていました。

また、半分遊び事みたいな仕事ももっていました。例えば、広島文化会館だったか、ああいうところで催し物がある時に、照明係ですか。そうすると、例えば藤原歌劇団がやってきて『カルメン』をやる時、無料で見られるところか、お金がもらえるわけですよ。他には宇宙品で仲仕をやっていたこともありますね。あのころは豪州から来た占領軍がいて、その人たちはヒツジの肉を食べるわけです。冷凍のヒツジが船で運ばれてきて、重くて、おまけに冷たかったことを覚えてます。ですから、いろいろやりました。

○石田 では、そういった掛け持ちの仕事をして生活費と学費を稼が

れていたのですね。

○青木 はい。そういうので何とかいけそうだったので行きました。

○石田 なぜ高等師範から広島大学に移ろうと思われたのですか。

○青木 あまり深く考えていなかったのではないかと思います。落ちてももともとだから、駄目もとでやってみるかぐらいのことだったと思います。その一方で、先生の教育よりもう少し幅の広いものが勉強できればというのも、どこかにあったのではないかと思います。広島大学という総合大学ですから、いろいろな可能性がある。ところが、広島高等師範だと英語のクラス、英文学のクラス、教え方のクラスみたいなことで、かなり限られてくるので、もう少し広くできないかなというようなことがあったのかもしれないですね。

○石田 同級生の方もほとんど受験されたのですか。

○青木 半分ぐらいは受けたのではないのでしょうか。家の都合などもあるって、早く先生になって稼いでほしいというような場合も。何しろ戦争直後で厳しい時ですからね。今も別の意味で就職は厳しいでしょうけれども、そのころは朝鮮、台湾、樺太、満州、それから復員の人がどっと入ってくる。職を探すというのはそんなに簡単ではなかったわけです。ですから、新しい教員免許状を持っていると、そういう中でこの切り札が非常に強くなるという見方もあったのではないかと思います。

授業の思い出

○石田 青木先生から頂いたメールの中にいろいろな先生のお名前が

書かれたものがありました。こういった先生方の授業で特に印象に残ったものはございますか。

○青木 教養部は科目が広く浅くというわけですから、その関係で一人の先生に付いていろいろなことを勉強するようなことは、あまりありませんでした。その時にお世話になった先生というのと、いろんな先生がいらっしやるのですが、俳句をなさって英文学にも詳しい鳴沢寡愼先生とか、教壇を行ったり来たりしながら日本語に訳すとそれがそのままになりそうな御興員三先生とか、そういう名物の教授がたぐさんいました。

それから、歌舞伎のテキストなどを一緒に読んだ大藪虎彦という先生がいらっしやいます。その人などは、『外郎売』という有名な歌舞伎のセリフが何も見ないでべらべらと口から出てくるような、その道の専門家がたくさんいます。私も口をあんぐりと開けているだけで、偉い先生がたくさんいるのだなと思って(笑)。

それで、中原(興茂九郎)先生の講義でも分かりますが、題は非常に一般的な題、



写真4 授業風景(昭和26年頃)文学部木造校舎。
教壇中央が梶井迪夫氏、右が飯野至誠氏。

例えば「西洋史概論」とかですが、内容はアッシリア語の楔形文字の入門で、中味はものすごく専門的というのがたくさんありました。

例えば、真下三郎先生の「上方語の研究」という題の講義があった。真下先生は京都祇園の遊郭のご出身なので。それは婦人語とか女性語とかいう題の本を出していらっしやいますが、東京大学に提出された文学博士の論文というのは、結局、祇園の言葉の文法でした。禿(かむろ)で始まってどうこうという祇園の中での階級制度みたいなものから、ほかの人には分からないような詳しいことを、ものすごくたくさんご存じで、そういう調子なので、それと「上方語の研究」というのとはだいぶ違うわけですね。

ですから、何か変な知識は得たのですが。とにかく、その雰囲気みたいなものは分かるのですね。非常に細かいことを突っ込んでいろいろ勉強していらっしやる先生方で、そういうご専門は誰にも譲らないという第一級の学者に学んでいるというのは、本当に刺激になります。

それから、私どもは「いのきゅうさん」と言っていました。フランス語の井上究一郎先生。この先生は後でロンサールの研究を岩波で出していらっしやいます。私たちには最初にフランスの民謡を歌って聴かせてくださいました。そういうフランス文学の大家になる方が、一年生の入門クラスをつかまえて民謡を口伝えに教えてくださいださるといふのは、これは広島の良いところだと思います。

創成期の大学というのは、教育概論などでも教えるのがベスタロッツ(Johann Heinrich Pestalozzi)の大研究者である長田新さん、文理大の学長が教えてくださいださる。偉い先生が初歩のクラスをお教えられると

というのは、私どものような、ぼつと出の、学問の世界とは全然縁のないところから出た者にとっては本当に驚きでした。

○石田　　すぐ緊張して授業を受けていたのですか。

○青木　　いや、緊張というよりは、びっくりしていた感じですね。「うわあ、すごいな」という感じで。それから中原與茂九郎先生、あの先生は不思議な組み合わせなのです。オックスフォードか何かにいっしたので、アッシリア学というのですか、それでは三笠宮と並んでオリエント何とかのまで書いたところなのでしょうけれども、全然そういう感じのしない、気取らない先生です。

それで、教室に来られる前に必ず郵便を取っていらつしやるので、背広の両方のポケット、それからシャツのポケット全部に郵便物が入っている。ですから、教室に入っていらつしやると、歩いている郵便箱みたいな感じですね。そういうくだらないことしか覚えていないのですが、ものすごく第一流で、ものすごくなりふり構わぬ先生がたぐさんいらつしやいまして、これはすごい所に来たなと思いました。

それからドイツ語の登張（正美）先生は、後で東大にお帰りになつて、ゲーテの専門家。また、フランス語の井上究一郎先生もやはり東大に帰つていかれた。東大などを出た若い先生がどさ回りをするときには広島に来るといふ何かがあつたらしくて、その点で非常に恵まれていたと思います。

それで、本家に帰っていくと、今で言う大学院の先生で専門のことしか教えないと思うのですが、私どもの時は、本当のドイツ語、フランス語の第一歩を一流の先生に教えていただくわけです。登張先生な

どは、いちいち東京から京都までドイツ人の先生に習いに行った話とか、井上究一郎先生は、戦争中でパリまで留学できなかったもので、仏領インドシナへ留学なさつたお話なども伺いました。

ですから、今のようないタイプに重点を置くというよりは、むしろ日本人でありながら外国語を苦勞して、しかも第一流になつた先生方。そういうお手本をいろいろ見ることができた点では、大変恵まれた環境にあつたと思います。

それから、村上忠敬さんなどは日本でも有名な天文学者でしょう。その方が天文学概論を教えてくださいました。おまけに、例えばオッカ尔特ーション（occultation）というのですか、すばる星が月の向こう側に隠れるときがあり、それを観測するのを学外で教えてくださいました。望遠鏡のある所ですから、大変多角的でいい。今のようになんとはできてはいなかつたけれども、内容的には結構充実した教養部でした。

○石田　　先生の世代というのは、戦時中の勤労働員であまり授業を受けれなかつたですよ。大学に入られてから、そのためにご苦勞されたようなことはございませんでしたか。

○青木　　それは、むしろ大変楽だつたように思います。というのは、中学校の時に全然勉強していないということで、頭の中が空っぽです。から、どんどん入っていくのですね（笑）。受験勉強なんて全然やっていないし、おまけに英語などは敵性語でやっていない。あちこち参考書を読むとか、受験のための何々を勉強するということはやっていませんので。考えようにもよるのでしょうけれども、むしろ空っぽだつ

た関係で非常に入り良かったように思います。

○石田 教養が終わって専門のほうに進まれますよね。その時に出会った先生で、特に印象に残っておられるのはどなたになりますか。

○青木 そのころは、やはり小川二郎先生が英文学、それから先日、写真をお送りしました榊井迪夫先生が英語学。また、若い先生で福田何とかという方がいらっしやいましたが忘れていきます。アメリカ文学のほうは、二世の吉田弘重先生がいらっしやいました。それから、元海軍兵学校の英語の先生だったと思いますが、東田千秋という先生。あれは英語の文官さんなのですかね。そういう先生方にもお目に掛かりました。

それから、私は英文学は駄目なので、英語学みたいところは適当に座っていたのですが、そちらのほうは文理大の山本忠雄先生。ディケンズ (Charles John Huffam Dickens) が専門だったと思いますが、その先生などの講義を聴きに行ったことがあります。

また、例えば文学部を出て就職ができないと困るので、滑り止めのために教員免許状をもらっておくのも良かろうと思って、教育学部へも出掛けて、英語教育の専門家の飯野至誠先生などにもいろいろと教えていただきました。

○石田 今、「私は英文学は苦手で、英語学のほうが」というお話があったと思いますが、英語学と英文学というのは教える内容が全然違うのですか。

○青木 いえ、あまり細かく分けると商売にならないので。例えば、内科のお医者さんでも盲腸の手術ぐらいはできるといふ、その程度で、

あまりややこしいことでなければ、私も英文学を教えることができます。ですから、小川先生のシェークスピア (William Shakespeare) の『ハムレット (Hamlet)』の講読とか、ご専門のウィリアム・ブレイク (William Blake) のものとかは、きちんと聞いておりました。

それから、福田さんはミルトン (John Milton) がご専門だったので、そちらのほうも。また、榊井先生は英語学のほかに中世英語がご専門で、特にチャウサー (Geoffrey Chaucer) のほうがお詳しく、それは中世文学に入りますから、英語学が自分の専攻の真ん中だけでも、周りも多少の勉強をしておかないとつぶしが利かなくなるといふことでやりました (笑)。

○石田 当時の英語の授業というのは原書講読が中心ですか。

○青木 そうですね。専門課程になりますと、やはり講読が多かったです。特に、小川先生が教えになったシェークスピアなどは、少し言葉が古いので、原本について詳しいことがやっておかないと、いい加減な現代訳みたいなものでは話にならないと。それで、講読演習みたいなものとかですね。

○石田 英会話の授業はなかったのですか。

○青木 会話は、その時、第一回生だから勝手にいろいろなものがつくられて、それで私も聖書を文学として読むクラブみたいなものをつくりました。ダブルデイという、イギリス英語を話す女の聖公会の宣教師さんがいらした。そういうふうな宣教師さんに聖書と結びつけると無料で来ていただけるわけです。それで私は、聖書の分からないところの質問を英語で宣教師の先生にすることで会話を。「便所はどこで

すか」みたいな会話ではなくて、むしろ仕事の上での会話というよう
な関わり合いをやりました。

○石田 ダブルデイさんというのは、大学の先生ではないのですね。

○青木 聖公会の広島の教会の宣教師さんです。ですから、クラブと
いうか部会というか、学校の正規のものではないかたちで会話を教え
てもらったことにしました。というのは、大学の正規のかたちだと、教
授とか助教授とか学歴とかがややこしいことになって、しかもそのこ
ろは、会話はバーリッツ (Berlitz, 英会話学校) みたいな所へ行けば
いい、大学というのは、もっと正式な講読演習をやる場所だとい
うか風があったので、そのあたりを適当に安く組み合わせる工夫をやっ
たわけです。

フランス語も、そんなことで。それから、ドイツ語のほうも、流川
の教会にシエイファーというドイツ人の宣教師さんがいらつしやった
ので、その人に会話を。そのように学外から、そして学校の正式な科
目ではないが、会話の力を伸ばすために、一回生ですから勝手なこと
ができたわけです。

○石田 その聖書のクラブというのは、学生さんが何名ぐらいおられ
たのですか。

○青木 時によってで、一〇名から二〇名の間ぐらいでした。それで、
いろいろな人が来ました。会話の勉強がしたいというので、工学部と
か。ですから、文学部の英文の独占ではなくて、かえって横のいろい
ろな広がりができたという点でも良かったと思います。

学生生活の思い出

○石田 お送り頂いた写真の中に、英語劇『リア王』の記念写真とい
うのがありました。これは、どういう経緯で行った活動になるのですよ
うか。

○青木 これは学校が、文理大と広島大学と女学院大学と県立女子大
学ですか、その四つぐらいが一緒になって、県立女子大には衣装のお
願いをする、女学院には、『リア王』の三人娘を男性がやってもしよ
うがないので女優さんをお願いする。そして、あとのごちゃごちゃは
文理大と広島大でやるということ。

それで、文理大の前原さんとおつ
しゃる方でしたか。リア王をなさつ
たのですが、白髪のおごひげがなく
てはいけないので、黒々とした付け
毛を買ってきて、それに白い粉を水
で溶いてあれしたのですが、それが
照明の熱で乾きまして、リア王が有
名なセリフを言うところで、粉が飛
び散って大変。僕らはおかしくてし
ようがなかったことを覚えています
(笑)。

そんなことで、何とかの打ち合わ
せとか、打ち上げとかで、男女一緒
に飲んだり話したりする時間もでき



写真5 英語劇『リヤ王』記念写真 (昭和27年頃)

ましたし。

○石田 これは毎年やるものですか。

○青木 私は一回やって、ぱっと出てしまったので後はどうなったか知りません。最初の時は試験的に、うまくいくかどうかということ。そして、駐日英国大使館が支援してくださるし、シエークスピアがご

専門だった東京文理大学教授の福原麟太郎さんなどが来てくださったって、日本全国的なもの、そういう意味で地方だけのものではなかった感じがしているのですが、その時は、ただ騒いでいるだけで大したことはなかったの(笑)。

○石田 今、女子学生の話が出たのですが、新制大学になってから共学化が進みます。初めて女子学生と接した時の気持ちというものはどうでしたか。

○青木 私どものところは女子学生が非常に少なかったと思います。ただし、教育学部の家政科というところは逆で、男性はほとんどいない。それから、教育学部の体育というと、女子の先生も男子の先生もいるというふうな。ですから半々のところもあれば、女子優勢のところもある。文学部などは比較的多いほうで、工学部などは、あまり女性の方はおいでにならないかと思っています。

○石田 では、女子学生がいるということを意識するような場面はなかったのですか。

○青木 あまりなかったと思います。ですが下級生になるにつれて、だんだん女性の数が増えていったと思います。私どもの時は、まだ高等師範は百パーセント男性ですから。

○石田 少し話を変えたいのですが、当時は学費値上げ闘争とか、学生運動が盛んな時期ですが、先生は関わらなかったのですか。

○青木 一回目の時はそういう余裕がなかったような気がします。やはり政経の学生に多かったのだらうと思いますし、漸次増えていくとは思いますが、そのころは、まず食糧の確保。三度の飯を食うのがやっとならなかつたし、いろいろなアルバイト、内職で忙しくて、あつちに行ったり、こつちに行ったり。ですから、学生運動というのは、まだまだあまりきちんと芽生えている時ではなかったように思います。

○石田 分かりました。同級生の方で仲の良かった方はどういった方がおられるのですか。

○青木 一緒のクラスにいた石黒昌幸というのが、修道学園に行つて、おそらく修道の図書館長になり、修道一本筋の先生になったのではないかと思います。それから、青木という、同じ名字ですが昭和六年に生まれたので昭六という男がいます。それは、教育学部の外国語学科にいたのですが、仲良くしておりました。フランス語で仲良くしていたのは、中国新聞社に行つた大牟田稔。それから、三重大学に行つて、名古屋の近くの曹洞宗の私立大学に移つた由井敏郎、中国新聞に行つた荒本昱夫、化学の村上一郎などがいます。また、四国の益田出(いずる)という香川大学へ行つたのがいます。岡山で高等学校の先生をしていた梶岡七大彦。こういう人たちと仲良くしていました。

○石田 こういったご友人の方々は、どこかに遊びに行くとかはされていたのですか。

○青木 一緒に遊びに行かなくても、学校から学校へ歩いて移る間に、

いつも話をしておりますから。例えば、皆実から千田町、それから出汐町、三角みたいな所をいつも一緒に歩いていきますから、どこかへ行かなければいけないということはあまりないわけです。

○石田 一日のうちに何回も、出汐町とか皆実町とか東千田の間を歩きまわることがあったのですか。

○青木 千田町の大学食堂で朝飯を食って、皆実分校まで歩いていく。今度は教育学部へ行かなければいけないので、そこから出汐町へ行くということで、結構いろいろ歩きました。

広島大学で一年になった時、お米の配給帳を大学の食堂に置いていました。そうすると朝ご飯、昼ご飯、晩ご飯は、大学の食堂へ行つて食べなければいけないのですが、それから歩いて淳風寮へ帰るのも面倒さいので、朝食から夕食まで勝手に歩いて、面白そうな講義を聴いていたわけです。

○石田 食堂があったのは文理科大学のほうですか、それとも出汐町の被服廠跡の方ですか。

○青木 私どもが配給帳を置いていたのは、文理大の千田町のほう。学校といっても、まだ出来たてのほやほやですから。はっきり分かれていまするわけではなくて、附属小学校は椅子も机も小型にできているので別ですが、文理大、文学部や附属高校の木造校舎、空いていればみんななあちこち使うというようなことです。

教育心理学とか教育学とか教育関係だと出汐町の昔の被服廠。ところが、あそこは、壁はきちんとしているのですが天井の明かり取りなどは壊れているのがたくさんあるので、学生はオーバーを着て教室に

入っていました。まだボールペンがなく万年筆を使っているので、雪などが降り込むと水でノートの字が流れるため教室で傘をさして講義を聴いたものです。先生もそれは文句を言えませんがね。

そういう時なので、写真のうちのひとつ、教室の情景があつて、みんなオーバーを着ているのはおかしいなと思ひますが、そんな理由があるのです。

○石田 なるほど。このいただいた写真は建物がきれいなので、文学部の木造校舎なのでしょうが。

○青木 はい、そうだと思います。そういうことで、朝ご飯をあの近所で食べて、それから皆実分校へ行っていました。

フルブライト奨学生に採用・渡米

○石田 お話をうかがっていると、充実した学生時代だったと思うのですが、卒業論文は何を書かれたのですか。

○青木 やはり広島は、多少の空襲とか何とかによる被害を考えておられたのでしょうか。学生があまり使わない本などは山の中に置いてあったらいい。聞いてみると、スコットランドとイングランドの境界に当たるところのパラッド (Paradise) の全集、確か六冊の厚い本ですが、それはパラッドをやる学生なんかいないだろうと思って山の中に疎開しておいた。それは残っているというので、私はそれを卒論に選んだことがあります。

○石田 それは今の話でしたら、たまたま本が残っていて、誰も借りそうにないからということで卒論のテーマに選ばれたのですか。

○青木 シェークスピアみたいものは誰でもやるでしょう。そうすると、なかなか本が借りられないわけですよ。だから、取り合いにならないものを何か探さなければいけないということで、結局、あまり人のやらないものをやったと。

○石田 後々の先生のご研究から見ても、その卒論というのは、どういう位置付けになるのでしょうか。

○青木 あまり大したことはないですね(笑)。その当時は何かやっているような気がしたのでしようけれども、今、見てみると、寝言みたいなものを、よく卒論として出して、受け取ってくださったなど。それが分かったので、これはありがたいような話ではあるけれども、という程度のことです。

○石田 この後、先生がフルブライトの試験を受けられます。これは、どういう経緯で受験されたのですか。

○青木 これは、大学のあちこちに、そういう募集の要項みたいなものがある、試験を受けるなら、いついつまでに願書を出せとあったので、駄目元で出したわけです。そうしたら、試験みたいなのがあった、今度は面接みたいなのがあった、しばらくしたら通ったと。それだけのことなのですけれども。

○石田 指導教官から勧められたわけではないのですか。

○青木 いや、それほどでは。先生方も、「君、大学院に残らないのか」と言われたので、「いや、残りますが、一年ぐらいちよつと行ってくただけですから。アメリカなんか大したところじゃないから」と言って、九年もいてしまったのですが(笑)。やはり人間が、少しねじが

緩んでいる関係で。私の両親なども、行って帰ってこないから、私のことを「鉄砲玉」とか言って(笑)。

○石田 もしもフルブライトに通らなかつたら、大学院への進学を考えられておられたのですか。

○青木 はい。しかし、大学院に行くと、また学生生活が延びるので、何か仕事があったり、教職があったりすれば、それをも思っていました。何しろ英語なんて、あまり使い道がない商売ですから。

○石田 当時は日本が戦争に負けてアメリカに占領されていたので、かなり英語に対する学習熱の強かった時代だと思うのですが。

○青木 戦争中に比べますと、敵性語が急にボスの言葉みたいに変わってしまったわけですから。

○石田 アメリカに渡られて、まずワシントン大学で、アメリカの習慣とかを勉強されたと回顧録に書かれていましたが、日本から行って面食らわれたことありましたか。

○青木 その時、同じ船に津田塾の高野フミ先生(のち理事長)が乗っていて、「青木さん、昔、アメリカに来たことあるの」と言われたので、「いえ、生まれて初めてです」と言ったら、「あなた、なんだか随分、面食らい方が、ほかの人はみんなぎくしゃくしているのに、ふわふわしているから」と言われたことがあります。やはり、そのころから鈍感だったのでしょう。ですから、ふわふわと、四週間のオリエンテーションとか何とかというのを、まずテストをしてロサンゼルスに行きたわけです。

○石田 アメリカに渡った後、それぞれフルブライトの奨学生の方が

各地の大学に行きますよね。なぜ、先生はカリフォルニア大学に行くことになったのですか。

○青木 これは、ロサンゼルスで、外国人の留学生のお世話をする夫人たちのグループがあつて、そこが何か奨学金みたいなものをくっつけてくれたらしいです。

フルブライトというのは、もともと日本が戦争補償金として出したお金だから円ですね。ですから、ドルのほうがないわけです。つまり、アメリカへ着いた後でのいろいろな費用を払う奨学金と抱き合わせにしないと実現しない。それで私の場合は、ロサンゼルスのクラブが、この人間に奨学金を与えるということになった。それは、ややこしい名前、スミスモンツ (Smith-Mundt) とかいう奨学金です。それから、フルブライトと組み合わせて奨学金が可能になったために、ロサンゼルスへ送られることになったわけです。

○石田 ですから、こういうことをしたいからこの大学とか、こういう先生がいるからこの大学というのではなくて、奨学金の都合でカリフォルニアに行くかたちになったのですね。

○青木 はい、そうです。ですから、みんないろんな所へ。例えば、オーバリン大学とか何とか大学とか、四〇人ぐらいいたと思います。そして結局、ロサンゼルスのカリフォルニア大学に行くのは私一人になっていました。一番近いのは、パークレーの化学に行く東北大学の正宗（悟）という学生だったのですが、その人と途中まで一緒に汽車で行きました。

○石田 フルブライトで入ったカリフォルニア大学は、大学一年生か

ら入り直すかたちになるのですか。それとも、大学院に入ったかたちなのでしょうか。

○青木 大学院へ入れてもらいました。日本のようなところでの学部 of 英語学と、みんなネーティブなどころの大学院ですから、初めは大変段差を感じましたね。

例えば、小川先生のシェークスピアの『ハムレット』だったら、一生懸命に一行一行読んで一幕か二幕。ところが、ロサンゼルス大学に行くとき、シェークスピアの戯曲三つを一週間で読むという。

○石田 すごい量ですね。しかも、難解な中世英語ですからね。

○青木 全然、量が違いますよね。ですから、そういう点で段階がありました。

○石田 では起きている時間はずっと、勉強、勉強ではないのですか。

○青木 そのようなものですね。川に子どもを投げ込んで水泳を教えるような調子ですよ。

○石田 量もさることながら、教え方はどうですか、日本と同じでしたか。

○青木 違いますね。日本は字面からどういうふうな解釈できるかということが主ですが、むしろ、こちらはそういうことは済んでいるので、シェークスピアの何々と、マローウ (Christopher Marlowe) の何々と、ミルトンの何々とを比べると、どういうふうな違いが出てくるのか。ですから、だいた言葉から離れた思想とか、主張とか、文学史とか、哲学的なものの中身とか、そういうことを背景にした講義があるわけで、大いに見方を変えさせられました。

○石田 進級とかはストレートにいったのですか。それとも、多少つまずかれたのですか。

○青木 日本と違って、一年の時はこれをやる、二年の時はあれをやるといふのが決まっていけないわけです。ですから留年というものが全然ない。その代わり、出るときは論文を書くか、試験を受けるかで、それにパスすれば出られる。そのときに、いろいろなものを集めた単位数の計算をする。その途中で、いろいろな大学院の指導教官から、これが抜けているからこれを取りなさいと、毎学期、アドバイスを受けるわけです。

ですから、そういう関係で落ちてはいないのですが、「私は言語学をやりたいんです」と言うと、「そのうち言語学部ができるから、しばらくいなさい」ということで、学部づくりを待つ過程は多少ありました。しかし、結局五年待ってもできないので、それなら、もう既にあるパークレーに行きますということで、その時に修士をもらって出ました。

○石田 そういう事情なのですね。略歴を拝見して年数がちよつと合わないで、どういう事情かなと思つたものですか。そのように年数が少しオーバーするようになつても、奨学金とかは制限なくもらえたのですか。

○青木 いえ。奨学金は、もう切れたので、自分でいろいろな仕事をもらっていました。特に私は外国人の学生係みたいなもの仕事をもらったので、月給といえませんが、お金はもらえたわけで、その関係で授業料が無料だったので。

○石田 その仕事というのは、どういったことをされるのですか。

○青木 外国人の学生というと、様子を知らないために、多少はいろいろな問題が起こったりするでしょう。こちらは一日の長があつたわけですから、それを利用して、あちこちへ電話をかけるとか、手伝つてあげるとか。

また、ロサンゼルスには、(日系)二世、三世、四世のために日本語を教える学校があるので、そういう所へアルバイトに行ったこともあります。それから、土産物屋の荷物の荷ほどきですか、そういう仕事もやったことがあります。

○石田 カリフォルニア大学のころの回想録を拝見していて気になつたのが、当時はまだ戦争が終わつて間もないころですよ。そういう中で、日本人に対する敵愾心とか、あるいは人種差別みたいなものを感じることはなかつたのですか。

○青木 それは案外少なかったと思います。むしろアメリカの人から受ける被害というよりは、アメリカにいる日系の人たちから受ける差別みたいなものが大きかつたように思います。

私の知っているロサンゼルスの大学の図書館の裏側に、日系の人がたむろして昼食を食べる場所がありました。そこなどでは、いわゆるカリフォルニア州内に住んでいる日系の人が一番上なのです。それから、ハワイから来る日系の人たちがいて、言葉が少し違うのですね。そういうことに非常に敏感なので、その人たちは少し下がる。それから、私のように日本語の人間は、そのもう一つ下ということで、かなりランクの上では下のほう。べつに痛痒は感じませんでした。

なるほど、そういうことがあるのかと思ったりして。

○石田 今、ハワイの日系人とカリフォルニアの日系人で言葉が少し違うというお話があったのですが、英語が違うのですか、日本語が違うのですか。

○青木 両方とも日本語はないわけです。それで英語が、ハワイなまりというハワイの人は怒ると思うのですが、ハワイの人たちが話すときに、アメリカの本土のような話し方をする気取っているように聞こえるわけですね。ですから、ハワイの人同士が話をするときは、ハワイ式に崩さなければ都合が悪いわけです。

それから、食べ物の嗜好なども違います。私は知らなかったのですが、「ポイ (poi)」とかいうもの。それは、言ってみればサトイモで作った、きんとんみたいなものですが、それを指ですくって食べるのがいと。日本でいう、そば練りのなものです。そば練りに、お醤油を全然付けないで、何も味を付けないで、指ですくって食べるようなもの。そういう好みがないと付き合えない（笑）。

ですから、私も同等に付き合ってもらわなくて大変幸福であった人間のうちに入りますが、そのように外から見るとみんな同じように見えても、やはり日系人の中で差別があるものだなと思って。

カリフォルニア大学での研究について

○石田 先生のように、外国の大学に行かれて、外国の大学で教鞭をとられた方は、広島大学の出身者ではほとんどおられません。先生がカリフォルニア大学で研究を進められるなかで、特に思い深いこと

といえば、やはりネズバース語の研究になるのですか。

○青木 ええ。べつにカリフォルニア大学で就職しようなんて考えていなくて、とにかく言語学が面白そうだからというので言語学に入れてもらった。そして、しばらくして、先住民の言葉の研究ができる人を探していたのがどうかというので、私でも良ければと。

ところが、日本語というのは非常に簡単な音韻組織で、今でも「L」とか「R」とかいうので騒いでいる人がいるぐらいですから、あちこち穴があるわけです。ですから、「私みたいな者が行ってもいいんですか」と言ったのですが、私はその音韻学のクラスでは成績が良かったらしい。それで、「構わない。行きたければ行きなさい」と言われて行きました。

○石田 ご著書のほうには、あまり音声学などは得意ではないみたいなことを書かれておりましたが、成績は、ご自身が思っているのと第三者が見るのでは、評価が随分違っていたのですね。

○青木 いや、それは一生懸命に勉強しなければいけないと思っていました。というのは、先住民の言語の研究分野のオーソリティーだった人は、私を受け入れた時、私が「日本から来ました」と言うのと随分悲しそうな顔をしたのですね。どこから来たと言えば良かったのかと思っていろいろ調べてみると、スウェーデン辺りから良かったらしい。

○石田 それは、どういう意味で、スウェーデンのほうが日本よりいいという話になるのですか。

○青木 日本だと母音が五つしかないでしょう。ところが、スウェー

デンはものすごく多い。英語よりもっと多くて、少なくとも一〇か
一一はあると思います。ですから、音を聞き分ける耳が少し細かく分
かれていますね。そういう意味で、きつと悲しそうな顔をなさつ
たので、これは頑張らなければいけないというので一生懸命に勉強し
ました。

○石田 なるほど。そういう視点で学生を見るような先生だったので
すね。

○青木 はい。ルイジアナ州で話されていたトゥニカ語は、随分お年
の女性の方一人だけが話すのですが、その先生は知っている言葉を聞
き出して、字引きや文法を書いたという大変な方だった。ですから、
その先生が「いや、日本からですか」というようなことを言われた時
に、これはどういうことなのだろうと。それで、意味が分かり、ここ
らも一生懸命にやった関係で、その先生から「行きたけりゃ行きなさ
い」と言われた(笑)。それで行ったわけです。

そして、一九六五年に論文を書き終わって終わりにりましたが、
その時は、今、見てもお恥ずかしいような文法を書いて学位を頂きま
した。

○石田 ご著書を読んでいて、インディアンの生活や文化の記述が詳
しく、どちらかというと言語学よりも民俗学のほうに近いなという印
象を持ちました。

○青木 いや、あまり分かったようには思わないのですが、できるだ
け、そういう生活を一緒にして、その中でいろいろな言葉の勉強をし
ようということはお勧めです。おまけに、そういうのをやって

いるのが面白いのですね(笑)。

それで、そういうことを踏まえて
いない言語学は意味がないと思
います。ですから、そういうのと一
緒に言語学の勉強を一生懸命にし
なければ、「これは何ですか」、「あ
れは何ですか」かだけをやってもし
ようがないと思って。

○石田 そういう生活文化を理解
した上で言葉を理解しなければい
けないというものの見方は、イン
ディアンの言葉を学ぶ中で気が付かれたことですか。それとも、言語
学の授業で徹底して教え込まれたことですか。

○青木 両方あると思います。パークレーというのは大変変わったと
ころで、先生の講義もいいのですが、同僚と話すのが誠に楽しい。同
僚というのは、みんなそれぞれに、いろいろな部族の言葉の勉強をし
ている関係で、私の行っているグループではこうだ、ああだと、茶飲
み話の中にいろいろなことが出てくる。それを聞いていううちに、い
ろいろなことが分かってくるし、そういう文化の面も知っていなければ
言葉も分からないということが、知らず知らずのうちに身につけて
きたという感じですね。

大学院のころは、セーフウェイ(アメリカの大手スーパーマーケッ
ト)の一番下の大きな瓶に入っている安いワインを飲みながら、勝手



写真6 准教授時代の青木氏(昭和48年)

なことをがちやがちや言っているうちに、いろんなことが分かってきたり、分からなかったり。そういういいところがあったような気がします。

○石田 カリフォルニア大学というのは、開放的な雰囲気のある学校なのですね。

○青木 そうですね。私が行ったところは、何かそういうふうな。ランキングというのは、どうでもいいと思うのですが、アメリカの公立で一番上のほうにいるのは、バークレーではないかと。私立だと、スタンフォードとかハーバードとか、いろいろな所がありますが。

そういう点で、バークレーには貧乏人がたくさんいるわけですね。今はだいたい右寄りになっていますが、私たちの時は、フィールドワークに行ったりしますと、ピンク大学と言われました。ピンク色というのは、だいぶ赤（共産主義のこと）がかって。

○石田 先生は、日本人としては初めてカリフォルニア大学の教員になった方になりますか。

○青木 いえ。そうではないと思います。加藤（敏夫）先生という数学の先生がいらっしゃったし、もう一人、エンジニアリングで何とか先生という方が。その人は私の友達だったのですが、その友達は工学で、その先生の口まねをよくしていました。「これ、大変易しいね」という意味の英語らしいのですが、ものすごく難しい方程式を見て「これ、易しいだろう？」とか言われて、「もう、うんざりした」とか言っていました（笑）。

○石田 やはり理系の方は違いますね（笑）。では、同僚の方にも日

本人の方というのは、ほかに何人かおられたのですね。

○青木 あまりいかなかったと思います。東洋の人というのは、ほかにもいました。

○石田 そうですか。今度は教えられる側から教える側に回って、カリフォルニア大学に残るかたちになりましたが、ネーティブなアメリカ人の学生を相手に授業は苦労されなかったですか。

○青木 言っていることは通じたのでしょうか。それで、学生の評価といいますが、エバリュエーション (evaluation) が学期の終わりに出てきますが、教科書を書いて金を儲けている意地悪な先生と言われたりしました。冗談じゃないよ、教科書なんかを書いて金儲けになるものかと私は思ったのですが。そういう例外もあります。一般的には、あまりひどいことは言われていないですね。だから通じてはいるのでしょう。

○石田 母国語が英語でない人が英語の言語学を教えるのですよね。

○青木 その辺りは、日本語の言語学みたいなものとか、東洋の言語史みたいなものから、大したことはなかったです。

○石田 では、受け持たれた科目は、どちらかというアジア系の言語を教える科目だったのですか。

○青木 はい、そうです。

○石田 そうですか。勝手に英語を教えられるのかと思っていたものですか。

○青木 いえ、英語のほうは専門家がたくさんいて、私など出る口ではないです。

後輩へのメッセージ

○石田 最後に後輩の学生たちに何か一言メッセージをお願いします。

○青木 後輩に能書きをたれるほどの人間でも、訓示をする資格もないのですが、「周りをよく見て判断できるようになってほしい」と思います。

明治の初めに大学を作る時、学者は京都、役人は東京、商売人は高等商業、という案があったそうです。欧米では僧侶作りにオックスフォードも、アメリカのアイビーリーグもできたわけで、わが国ではこういう宗教と無関係の教育機関を作ったのは目の付け所が良かったと思います。でも気をつけないとそういうところに行つて、国の富を私有化する術を身につけた「経済学修士」になったり、金持ちの番犬になるためにロースクールへ行って、外資系で働くのが人生の目的なら、外国の金持ちの道具で終わりです。

ある程度の富は得なければいけません、「壮九重於内所居不過容膝 羅八珍於前



写真7 青木氏近影 (家族集合写真、平成28年9月)

所食不過適口」(どんなに立派な豪邸を作っても、身を置く場所はせいぜい自分の膝を入れる広さでしかない、どんなに素晴らしい山海の珍味を並べても、食べるのはせいぜい口に入る量でしかない)と千年以上も前に誰かが言っています。

東日本大震災の日、アメリカの郵便局に並んでいると前の人が振り向いて「欠陥の原発を売りつけられて融解、すみません」と言いました。敗戦まで「わが方の損害、軽微なり」と言い続けた大本営発表の体質は今も生きています。これを見極めて、原価の何倍も暴利を貪っているのは誰か、下請け会社の技術者として食や生活に安定もないのはなぜか、といった周りをよく見て判断できる人になってほしいと思います。

幸い広島は、会社日本の社畜製造工場の歴史もなく、旧帝大の桎梏もないので、楽な気持ちで、この国を、幸せな住み良いところにしてください。

(あおき はるお・カリフォルニア大学名誉教授)